

名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2026年1月23日

学部・学科名 外国語学部・中国語学科

担当教員氏名 楊紅雲

1. 区分	<input checked="" type="checkbox"/> 中期留学 <input type="checkbox"/> 語学研修 <input type="checkbox"/> 海外実習
2. プログラム名称	2025年度中国語学科中期留学（インターンシップを含む）
3. 渡航先国名	中国
4. 派遣期間	2025年8月30日（土）～ 2025年12月6日（土） 99日間
5. 派遣先教育機関名	西安外国语大学
6. 参加学生数	8名
7. 派遣目的	現地派遣による語学研修および日本語教育実習
8. 派遣内容	2025年度の中期留学は、前年度に続き西安外国语大学で円満に実施することができた。 西安外国语大学には日本のみならず世界各地から留学生が大勢来ており、留学プログラムも多種多様である。本学の派遣学生は、先方大学所定の「中期留学カリキュラム」に含まれる「語学の授業（必修）」と「文化の授業（選択）」を受講するほか、インターンシップとして、先方大学の学内授業に組まれた「日本語教育実習」にも参加することになっている。 語学の授業は計198時間あり、「精読」、「口語」、「リスニング」に分類された実践的な中国語科目が用意されている。学生はレベル分けされたクラスでこれらを受講する。インターンシップは計120時間あり、先方大学の学生に日本語を教えたり、現地教員のアシスタントを担当したり、学生同士で互いに日中文化について紹介し合ったりする。このほか、西安外大で毎年開催される留学生向けの世界遺産見学や中華料理のイベントなどにも参加することができ、大学院生と一緒にゼミの授業に出席したりすることも可能で、これらは中国文化に対する理解を深める絶好の機会となる。

9. 成果	<p>2025 年度中期留学の成果として、以下の 4 点が考えられる。</p> <p>1. 派遣コースの拡充</p> <p>まず、2 年前に新規開発した西安コースの安定化を図るとともに、学生の派遣人数を初年度の 1 名から翌年には 5 名、さらに今年度は 8 名へと、着実に拡大させることができた。ありがたいことに、派遣人数が増加しても、受け入れ先大学の条件に変更はなく、語学カリキュラムからインターンシップ内容に至るまで、すべて本学の希望通りに実施することができた。</p> <p>2. 優遇措置の継続</p> <p>次に、本学担当教員による事前交渉の結果、本プログラムに関する諸費用について、前年度に適用された優遇措置が今年度も継続されることとなった。特にインターンシップにかかる諸費用は前年度と同様に「全額免除」で合意に至っている。加えて、その内容も多種多様でたいへん充実している。</p> <p>3. 新築寮宿泊枠の確保</p> <p>先方大学に新しい学生寮が建設されるとの情報を受け、本学の担当教員が早い段階から先方の責任者に連絡を取り、交渉を重ねた結果、今年度の本学派遣学生は全員、新築された学生寮に宿泊できることとなった。さらに、来年度以降も継続して利用できるよう配慮いただいている。</p> <p>4. 派遣学生にとっての成果</p> <p>参加学生が留学後に提出した成果報告レポートには、「留学前は中国語を実際に話す機会が乏しく、発音にも不安があったが、現地で中国人が日常的に使うフレーズに触れることで、自分の伝えたいことを言葉にしやすくなった」、「インターンシップでは日本語に関する研究論文の発表を聞く機会があり、日本語について自分がまだ十分に理解できていない部分が多いことに気づいた」、「韓国人のルームメイトとの生活を通して、暮らし方や価値観の違いをより深く理解することができた」といった声が寄せられ、自身の成長を実感しているようだ。また、留学経験については、「卒業後の進路選択や将来、国際的な場で働く際に役立つと感じている」、「この経験を活かし、将来は多様な価値観を持つ人々と協働する仕事に挑戦したいと考えている」とも述べており、留学による実りある成果がうかがえる。</p>
10. 備考	

以上

2025 年度中国語学科 中期留学成果報告レポート

提出者：竹川 綾乃

所属：中国語学科 3 年次

西安外国语大学での授業には、文法や単語の内容はもちろん含まれているが、常に「実践」と隣り合わせのものであった。特に印象的だったのは文法の講義である。教室で学んだ文法が、実際にどのように使われるのか、ネイティブが使う例文を基に、深く掘り下げた解説が行われた。また、インプットだけでなく、アウトプットの機会が豊富に設けられていた点も特徴的である。学んだ文法を定着させるため、実際に学内にて、現地の学生にインタビューを行う課題もあった。教室の外へ飛び出し、自分の言葉がどれだけ通用するかを肌で感じる経験は、語学学習における大きな自信となった。クラスには様々な国籍の留学生が集まっており、授業の一環として、自国の文化を紹介するプレゼンテーションが実施された。私は日本の食スタイルや結婚式の贈答習慣について PowerPoint を用いて発表した。

今回の留学で得た最大の成長は、コミュニケーションに対する姿勢の変化である。渡航当初は、自分の中国語に自信が持てず、ミスを恐れて消極的になってしまう場面が多くあった。しかし、スピーキングレッスンにおいて、「完璧に話すこと」よりも「伝えようとする意志」が重要であると気づき、たとえ間違っていても、自分の言葉で話すことで、ミスを恐れずに挑戦できるようになった。この経験を活かし、将来は多様な価値観を持つ人々と協働する仕事に挑戦したいと考えている。

2025 年度中国語学科 中期留学成果報告レポート

提出者：岡山 奈由

所属：中国語学科 3 年次

西安外国语大学での授業内容は本学の授業と似ていて、先生に当てられて答えたり、周りのこと話し合うことが多かったりした。とにかく声に出すということが多かったが、聞いて見ているだけでは会話はできないため、話すことが重要だと感じた。

インターンシップ活動では毎回授業の最初に日本の文化や食などを日本語と中国語で紹介した。現地の学生さんは日本のこと興味をもって日本語を勉強しているため、関心をもって話を聞いてくれたり、日本語の敬語が難しいから教えてほしいと質問に来てくれたりした。私が留学を通して成長したと感じたところは、町の人たちと会話をするとき、初めはほとんど聞き取ることができず、ごまかしていたり、何度も聞き返してやっと理解できたりしていたが、途中から聞き取れることが増え、授業で習った単語や文法が日常で使えていると実感して嬉しくなった。

現地では、インターンシップ活動や言語パートナーである中国人学生と交流することができ、日本語と中国語を交えて会話を楽しんだり、観光地を案内してもらったりした。クラスメイトには様々な国からの留学生がいて、一緒に遊びに行ったりご飯を食べたりすることで、それぞれの国の習慣を教えてもらったり、日本語を教えたりと交流ができた。

日本には多くの中国人がいることから、将来きっと役に立つと思い中国語を勉強し始めたが、学生のうちに中国への留学という経験ができる本当に良かったと感じている。

2025 年度中国語学科 中期留学成果報告レポート

提出者：河合 真菜

所属：中国語学科 3 年次

現地到着後にクラス分けテストがあり、1~6 班のいずれかに振り分けられた（希望により別のクラスに移ることも可能だった）。私は HSK5~6 級相当の授業を行う 5 班に振り分けられた。授業は「総合演習」「口語」「読み書き」の 3 科目があり、教科書に沿った内容に加え、学生からの質問に応じて、より現代的な表現やネイティブの感覚についても教わった。同じクラスの他国の留学生と交流する機会が多く、日本のアニメに关心を持つ学生も多かったため、簡単な日本語のフレーズを教えることもあった。また、会話を通じて各国の文化や社会制度について理解を深めることができ、例えば彼らから母国の徴兵制度について聞けたことは、貴重な経験であった。

インターンシップでは、作文の添削や発音指導を行ったほか、同年代同士との交流として、若者の間で使う口語表現について意見交換を行った。担任の先生とは三度一緒に食事をする機会があり、日本と中国の食文化の違いについて学んだ。

これらの体験を通じて成長を実感した点は、会話能力の向上である。留学前は中国語を実際に話す機会が乏しく、発音にも不安があったが、現地で中国人が日常的に使うフレーズに触れることで、自分の伝えたいことを言葉にしやすくなった。また、帰国直前にはインターンシップ担当の先生から発音が上達したと言っていただき、今後の中国語学習への大きな自信につながった。